

『空海マオの青春』PDF版サンプル

これは『空海マオの青春』PDF版サンプル（**タテ書き・ルビ付き**）です。

ページのめくり、ジャンプは「アドビリーダー」の書式にしたがって下さい。参考までに、ページのめくりは画面右端のスクロール一番下の「V」を押せば、次のページに進み、一番上の「^」を押せば、前のページに戻ります。画面の拡大は「+」、縮小は「-」ボタンを。ページ内におさめるときは  ボタンを。

（または  ボタンを使用します。

あるページにジャンプしたいときは、画面上部に「1 / 17」とあります。「17」は全体のページ数を表しています。「1」の所にジャンプしたいページ数を入れ「Enter」キーを打つと、そのページにジャンプします。



前編

御影
祐

『空海マオの青春』前編 目次

第一章 志学 — 側近政治家

- 1 上京
- 2 旧都平城京
- 3 新都長岡京
- 4 南家藤原継縄なんけ つぐただ
- 5 重臣佐伯今毛人いまえみし
- 6 北家藤原園人ほっけ そのひと
- 7 官軍惨敗
- 8 崇りた

第二章 挫折 — 大学寮退学

- 1 失望
 - 2 鷹狩り
 - 3 宴の若者たち
 - 4 学友雛麻呂ひなまろ
 - 5 妓女ナツメぎじよ
 - 6 大学寮
- 二年目 7 遷都のうわさ 8 退学

第三章 迷い — 三教の狭間はざま

- 1 南都仏教入門
 - 2 長老二人
 - 3 仏教修行
 - 4 『般若心経』の矛盾
 - 5 煩惱の夏ぼんのう
 - 6 高利貸し
 - 7 山行登拝
 - 8 太龍山修験
 - 9 深夜の陀羅尼だらに
- 10 石鎚山いしづちやま、金峰山きんぷがせん登拝
 - 11 三教比較の書
 - 12 未完 『聾瞽指帰』ろうこししいき

第四章 仏教 — 室戸の覚醒

- 1 生駒山百万遍修行 いこまやま
- 2 離脱
- 3 太龍
- 山南の舎心岳
- 4 闇夜の魔物
- 5 空無と くうむ
- 無常観
- 6 二度目の百万遍修行
- 7 父の病
- 8 室戸岬
- 9 双子洞窟の魔物
- 10 台風襲来
- 11 百万遍貫徹
- 12 『聾瞽指帰』完成 ろうこしいき

『空海マオの青春』後編 目次

第五章 探求 — 新しい仏教

- 1 平安京
- 2 平凡な仏説
- 3 習合仏教 しむごうぶつ
- 弁別
- 4 改題 『三教指帰』 さんけうしいき
- 5 雨乞い
- 6 僧尼検察
- 7 仏説阿弥陀
- 8 地獄と極楽
- 9 刑場の徒役作業
- 10 祈りの効き目
- 11 善行のお返し
- 12 富士山噴火

第六章 肯定 — 空無くうむと清浄

- 1 『大日経』発見
- 2 自心を知る
- 3 解けた矛盾
- 4 心の声
- 5 悉有しつうぶつしやう仏性
- 6 貪欲と不安
- 7 歡喜の「大般若経会え」
- 8 再会
- 9 穢けがれと清浄
- 10 入唐にっとう留学僧
- 11 小事と大事
- 12 沙弥の死

第七章 密教 — 夢の実現

- 1 遣唐大使藤原葛野麻呂かどのまろ
- 2 得度せず
- 3 再出航
- 4 唐国着岸
- 5 二度の窮地
- 6 長安入城
- 7 驚きの『般若理趣経』
- 8 青龍寺せいりゆうじ惠果阿闍梨あじやり
- 9 投華とうげ得仏とくぶつ
- 10 明けの明星
- 11 惠果入滅
- 12 帰国



太龍山南の舎心岳 「空海座像と明けの明星」

「プロローグ」

西暦七八九年五月二十八日、金星が百二十二年ぶりに太陽面を横切った。太陽・金星・地球の直列による明星の日面通過である。さらに八年後の七九七年五月二十六日、金星が再び日面を通過する。

それは空海マオ十五歳——讃岐より長岡に上京して一年後のことであり、室戸岬に急ぐ二十三歳の夏であった。

ときの空海にこの天文現象の知識はない。ただ、明星がいつになく光り輝いていることだけは知っていた。

空海マオの

青春

第一章 志 学

―側近政治家

1 上 京

延暦七年九月、旧都奈良より長岡に遷都して四年の歳月が流れた。

佐伯マオ（真魚）――後の空海はこの年十四歳。夏の空気が秋風に変わる頃、マオは母方の叔父阿刀あとの大足おおたりとともに讃岐さぬきを発った。

一昨日大小の船でにぎわう難波港なにわに着き、大和川を一日がかりでさかのぼると、昨日は額田ぬかだの泊まりに宿を取った。額田を北上すれば運河は佐保川さほと名を変え、平城京奈良に至る。が、大足おおたりとマオは旧都ではなく、大和に向かう小船に乗りかえ、桜井で船を降りた。

叔父は言った。「ここには宿がないので今

宵は近くの寺に泊めてもらおう。明日上かみつ道を下つて飛鳥あすか、藤原京跡をめぐると。

大足おおたりは来年桓武天皇かんむの次男、伊予親王いよのご進講しんこう（家庭教師）を務めることが決まっている。それを機にかねて思惑通り、甥おいのマオを都に呼び寄せた。マオは数えの十五歳。『論語』の「十五にして学に志す」を意識したことは間違いあるまい。

伊予親王いよは来春七歳。儒学はしばらく読みが中心となる。大足おおたりにとって容易い講義ながら、相手が相手だけに模擬授業をやっておきたい。大足おおたりはその相手として甥おいのマオを考えた。

マオの父は讃岐国さぬきのくに多度郡たどの郡司ぐんじ佐伯田公たぎみ、大足おおたりの実兄である。田公たぎみと阿古屋あこやの一子マオは故郷で神童と評判であつた。讃岐では二年間国学に通い、儒学の基本である『論語』をすでに読み終え、今は他の書物に取りかかっている。儒学を講義するにはうつつつけの存在であつた。

マオにとつても早めの上京には意味がある。郡司の子ながら、マオは帝都の大学寮を目指している。大学寮は九年制、日本に一つしかなく、入学年齢は十七歳である。入学までの数年間、大足おおたりが下準備としてマオの勉学を見る。それも兄との約束であつた。将来はマオを高級官僚として、あるいは天皇の側近政治家として出世させたい。それは讃岐佐伯家の切なる願いであつた。

マオを長岡に迎えるにあたってまずは旧都を巡り、この国の歴史を教える。それは甥おいの将来に大いに役立つはず——大足おおたりはそのように考え、飛鳥あすかや奈良に寄り道することにした。儒学者であり、史家でもある大足おおたりらしい配慮であつた。「この国の歴史を見てほしい」と大足おおたりは言った。

二日前二人は供の者数名とともに難波港なにわに下船した。旧都平城京と難波なにわは大和川によつて結ばれている。一行は舟を乗り継ぎ、ようやく飛鳥の地まで来たのであつた。

翌朝マオは本堂から流れる読経どきようの声で目を覚ました。あたりはまだ薄暗い。大足おおたりはすでに起きており、顔を洗いに部屋の外へ出た。

マオは先に起きねばと思いつつ、ふとんの中でもじもじしていた。目はとうに覚めている。だが、股間が突っ張っておさまらないのだ。一、二年前から毎朝のように感じる不如意ふにょいであり、男として自然なことと思いつつ、すぐにふとんから出られない。どうにも恥ずかしさを覚える事態だった。

大足おおたりは部屋へ戻ると身支度を始めた。そして「マオ、そろそろ起きなさい。朝飯を食ったら方々回らねばならん。早めに出た方がいい」と言った。朝日が射し込み、部屋が一気に明るくなる。

マオは「はい、ただ今」と答えると、やむを得ずがばつと起きあがった。布団をたたむと叔父に背を向け、ゆつくり着替えを始める。そのうちようやくいちちもつ一物はしぼみ、顔を洗いに

外へ出た。さっぱりした顔で戻ると、正座して叔父と朝の挨拶を交わす。

大足はマオの素振りを知ってか知らずか、軽くうなずき「お早う」と返した。

朝食を終えると、二人は馬に乗って出発した。供の者は夕方まで寺で待つ予定だ。

やがて二人は上つ道を下って飛鳥に到着した。道の辺や田んぼの土手に曼珠沙華が群生して針のような花が開いている。二人は古墳群を眺めつつ明日香をめぐる。廃墟となった板葺きの宮、本堂一つとなった飛鳥寺を訪ねた。

飛鳥寺近くに立つと大足は北の小高い丘を指さし、「あれが天櫓の丘じゃ」と言った。

そしてマオに飛鳥の歴史を語る。女帝推古天皇、聖徳太子、十七条憲法、仏教到来。蘇我蝦夷、入鹿父子の専横。板葺きの宮で中大兄皇子、後の天智天皇は蘇我入鹿の首をはね、改新の詔を出された……。

マオは叔父の言葉に耳を傾け、目の前の廃

墟や田畑がその舞台であったことに驚きを隠せない。偉人たちの嘆きや憤怒、争乱の喧騒が聞こえるような気がした。

大足は最後に壬申の乱について解説した。

「天智天皇の死後、弟の大海人皇子は甥にたたる大友皇子を倒し、天武天皇として即位なされた。それは血で血を洗う骨肉の争いであった。さらに天武の治世には謀反の罪で憤死した大津皇子の悲劇もある。天智、天武両帝はともに仁政を目指された。ところが、いざ皇位継承となると血が流れる。そして、怨念が後を引く」

「叔父上、怨念が後を引くとはどういう意味ですか」

大足は答えようとして口を閉ざした。

「詳しく説明するには時間が足りぬ。都に來ればいずれわかるであろう……」

その後二人は馬を走らせ、香具山を左に見て正午過ぎ藤原の宮跡に到着した。

広大な平原の中、大極殿とおぼしきあたり

にたたずむ。周囲は全て田や畑になっており、この地がかつて政治の中心だったとはとても思えない。

田には^{こがね}黄金色の稲穂が実っている。今年は数ヶ月に渡って日照りが続き、田植えが大幅に遅れた。大規模な干ばつが予想されたが、何とか刈り入れの時期を迎えたようだ。讃岐では父や農夫たちが今年是不作だと嘆いていた。通り過ぎた地でも立ち枯れの稲が目についた。マオは四国と畿内ではずいぶん違うものだと思った。

^{おおたり}大足は水筒を取り出して口をつけると、東のなだらかな丘を指さした。その背景には青垣のような山々が連なっている。一部では紅葉が始まっていた。

「ほれ。東に丘のような小山が見えるじやろ。あれが天^{あめ}の香具山^{かぐ}。そして西の方、こんもりした山が畝傍^{うねび}。北にぼつんと見ゆるが耳成^{みみなし}。それらを大和^{やまと}三山と呼ぶ」

そして^{おおたり}大足は藤原京の歴史を語り始めた。

天武崩御ほうぎよの後、女帝持統天皇じとうがここに都を定めたのは今から百年前のことである。

「持統天皇じとう最大の功績は大宝律たいほうりつりよう令を制定されたことじゃ。これによって日本はようやく法律によって治められる国となった。この律令体制の根本こそ儒教による仁政じゃ。だが、この地も国をまとめ、大きな政治を行うには狭すぎた。わずか十数年で元明天皇げんめいは平城遷都を決断なされたのじゃ」

ここもまた歴史の舞台だったのか、とマオは改めて周囲を見回した。見渡す限りの田畑は、かつてこの地に帝都があったと想像もつかない。青空の下でトンビが大きく輪を描いて飛んでいる。トンビは藤原京の歴史を眺めたに違いない。これから自分はどのような歴史を眺めることになるのだろうか、とマオは思った。

大足おおたりは再び東の香具山を指差した。「今日我が飛鳥に向かった道かみを上つ道、今来た道を中つ道と呼ぶ」

そして西に視線を転じ、畝傍山うねびを示した。

「あの畝傍うねび近くが藤原京の西の端で、そこに下つ道がある。下つ道をまっすぐ北へ伸ばせば平城京羅城門らじょう、朱雀大路すざくにつながる。つまり、中つ道と下つ道の間がちょうど平城京左京の大きさじゃ。わかるかマオ、平城京の巨大さが」

「はい」と応じつつ、マオには見渡す限りの平原から、さらにその倍を想像することは難しすぎた。

古都見学はここまでとして二人は桜井に戻った。そして供の者と船に乗り、額田ぬかだから佐保川を北上して奈良へ向かった。船が羅城門南の泊まりに着く頃、すでに日は暮れていた。